令和５年度　第１回沼津市総合教育会議　議事録

○　**開催日時**　令和６年１月 25 日（木曜日）14 時 00 分～16 時 03 分

○　**開催場所**　沼津市水道部庁舎３階会議室

○　**出席者**　市　　長　頼重　秀一
教 育 長　奥村　篤
教育委員　重光　純
教育委員　土屋　葉子
教育委員　川口　浩史
教育委員　佐藤　清子

○　**協議・調整事項**
貴き志を持つ人づくりとまちづくり～次の 100 年へ～

【内容】

１　開会

２　市長挨拶

教育委員の皆様方には、それぞれのお立場において、沼津市の教育行政に多大なる御理解と御協力、御指導、御鞭撻を賜り、この場をお借りし、市民を代表し心から感謝申し上げる。

昨年、沼津市は、市制 100 周年という大変おめでたい年を迎えたところである。全国で 89 番目、県内では、静岡市、浜松市についで３番目の市制施行であり、歴史と伝統のあるまちと自負している。市制 100 周年を盛大に祝うために前年度から準備期間を設け、令和５年は大勢の市民や関係の皆様方の御理解、御協力をいただきながら官民一体となった事業を 36 事業、市民の皆様方からの御提案による事業を 22 事業と、数多くの事業を開催した。多くの子供たちにも様々な事業の運営、準備等に御理解、御協力をいただき、市民の皆様方をはじめ、多くの子供たちにも沼津への誇りと愛着を感じてもらえた一年であったと捉えている。市制 100 周年記念事業を開催するにあたり、先人達への感謝と敬意、誇りと愛着、市民との協働、そして次の 100 年への新たな一歩という４つのコンセプトを持って取り組み、子供たちにも役に立つような事業等も開催できたと考えている。改めて多くの御理解、御協力をいただいた皆様方に対し心から感謝と敬意を表する。

総合教育会議は、教育委員の皆様方と市長が意思疎通を図り、思いを共有しながら連携して沼津市における教育行政をしっかりと推進していくために、市長が開催するものである。子供たちのことについてしっかりと議論する場は極めて貴重であり、教育には子供たちの未来に関わる重要な案件が多々含まれている。私は、子供

たちの未来はまちづくりの未来にもつながると考えており、「まちづくりイコール人づくり」「人づくりイコールまちづくり」という言葉もあるように、この２つは総合的に関連し、切っても切れないものであると捉えている。この後、教育委員の皆様方からそれぞれのお立場で忌憚のない御意見を賜り、本日の総合教育会議が意義あるものになるよう御理解、御協力をお願い申し上げる。

３　教育長挨拶

現在、教育委員会では、３年前の総合教育会議で協議された沼津市教育大綱に基づき策定した沼津市教育基本構想の目的である「誇り高い沼津を創造する　貴き志を持つ人づくり」を目指し、「人間力を磨く教育」と「地域総がかりで取り組む教育」を一体的に推進している。本日の総合教育会議では、本年度が市制 100 周年の節目の年であることを踏まえ、次の 100 年を見据えて、「貴き志を持つ人づくりとまちづくり～次の 100 年へ～」を議題として、賴重市長と私ども教育委員会が一緒に話し合い、考えていく。次の 100 年の沼津のまちづくりを担う子供たちが、新しい時代に求められる資質・能力を身に付けていくためには、感性豊かな心やシビックプライドの醸成が非常に重要となる。そして、子供たちが心身ともに健やかに成長できる環境を確保することも私たちの大きな使命であると考えている。

本日の会議が、それぞれのお立場から様々な角度で活発な意見が交わされ、本市が推進する「貴き志を持つ人づくり」が着実に前進する有意義な会議となることを期待している。

（出席者紹介）

４　協議・調整事項

貴き志を持つ人づくりとまちづくり～次の 100 年へ～

会議の進行は、沼津市総合教育会議設置要綱に基づき、座長である市長が行う。

（市長）

本日の議題は、本年度が市制 100 周年の節目の年であることを踏まえ、次の 100 年を見据えて、沼津市教育大綱に掲げる「貴き志を持つ人づくり」が今後の本市のまちづくりにもつながることから、「貴き志を持つ人づくりとまちづくり～次の 100 年へ～」とした。非常に大きな議題であり、特に市長部局と教育委員会の連携が必要であると考える次のテーマで意見交換を行っていきたいと思う。

テーマ１は、「芸術文化の充実や地域資源の活用について～薫り高い文化やシビックプライドの醸成に向けて～」、テーマ２は、「多様なセーフティネットの確保について～支援を必要とする子供たちの実態を踏まえて～」である。

テーマに入る前に、「本市の 100 年の歩み～人づくりとまちづくり～」ということで、市制 100 周年を迎えた本市のこれまでの人づくりとまちづくりの歩みを振り返り、これからの 100 年に向けて時代を支える子供たちに求められる力や生き方、また、地域総がかりでどのように子供たちを育てていくべきかについて意見交換を

行う。
　意見交換を行う前に、事務局から説明をお願いする。

（事務局）
　市制 100 周年を迎えた沼津市のこれまでの人づくりとまちづくりの歩み及び市制 100 周年記念事業について説明

（市長）
　教育委員の皆様方から御意見等をお願いする。

（委員）
　子供たちが将来生きていくためには、どこでも誰とでも、ある程度やっていけるだけの社会性やコミュニケーション能力が重要だと思っている。それがどうやって身に付くのかを考えると、誰とどのように話し、どのように意思疎通するかは、日本語能力にかかっていると思う。私は、どういう表現でどういうことを話すかによって相手にどう伝わるかを考えながら弁護士の仕事をしている。日本語能力がなければ、コミュニケーション能力もないと思う。沼津では英語教育に力を入れている部分があり、確かにグローバル化において英語が重要であること自体に疑いはない。しかし、それよりもまず足元の日本語がしっかりできないと、そもそものコミュニケーション能力が身に付かないと考えている。特に、言語能力が低い場合、論理的な思考力も減退していくと言われているため、やはり日本語教育が重要ではないかと思っている。
　日本人の特性として、今回の能登半島地震でも、炊き出しでしっかりと順番を守って並んだり、いろいろと周囲の人のことを考えながら生活したりできる。そういった高い社会性や協調性は、他国の人よりも日本人が秀でていると思う。そのような日本人が元々伝統的に持っている国民性や美徳はこれからも引き継いでいきたい。グローバル化や多文化共生という言葉もあるが、ただ単に多文化を受け入れるのではなく、まず日本人としての自己をどうやって立脚していくのか、拠って立つものがしっかりしていないと多文化に飲み込まれてしまうだけなので、まず日本語教育と日本人として受け継いでいくべき伝統的な考え方を大切にしていくべきだと思う。

（市長）
　社会性、協調性というお話が出たが、学校教育の中でも重要な分野であり、地域社会でも同様だと考えられる。子供たちの社会性や協調性を身に付けられる場面はいろいろとあるため、教育委員会と市長部局がしっかりと連携する必要性を改めて感じた。
　また、アイデンティティについては、少し勘違いされている部分もあるが、そもそも個人、すなわちその人のそのものというところをしっかりと落とし込んでいかないと、本当の意味での国際化とは言えないと捉えている。

（教育長）

私は特に命を大事にしてほしいと常に校長先生方に伝えている。皆様御承知のとおり、元日、最大震度７を観測した能登半島地震が発生した。本来ならば家族や親戚が集まって一年の始まりを祝う日に、大切な方々の尊い命を失った御遺族の心中をお察しする。また、安否不明の方もおり、その捜索はもとより、被災された方々には一日も早く復興、復旧がなされ、穏やかな日々を取り戻せるよう心よりお見舞い申し上げる。これまで、天災は忘れた頃にやってくると言われたが、29 年前の阪神淡路、13 年前の東日本、８年前の熊本、そして今回の石川と忘れた頃ではなく、震災は忘れる前にやってくるという認識を持たざるを得ない。今回の大規模地震は、たまたま私たちの生活エリアで発生しなかっただけであり、明日は我が身である。自分たちが、被災地、被災者支援に向けてできることに取り組むことと併せて、これまで以上に防災意識を高め、大人も子供も危機回避や減災への判断力を身に付けていくことが非常に大事だと思っている。地球温暖化による気候変動は、令和５年も日本各地に線状降水帯を発生させ、その被害状況は命の危険に迫るものであった。県内では掛川、菊川の突風、竜巻、沼津市においても浸水被害は記憶に新しいと思う。今後も激甚化する自然災害は避けられない。南海トラフ巨大地震のように広域的な大規模災害においては、東日本大震災の事例にもあったとおり、発災直後の行政の対応には限界がある。各学校で防災アプリを活用した授業、あるいは地域で実施されている避難訓練などを通じて、避難経路の確認、避難路上の危険要因の把握を行い、自分の命は自分で守るという自助を心身に刷り込む。そして、地域で助け合う共助では、中学生や高校生の働きが期待されていることを自覚できるように啓発していく。これまで以上に先生方や子供たちの防災意識を高めることが必要ではないかと思っている。自助共助の行動が、激甚化、頻発化する自然災害の被害を最小限に留めていくものであり、これから激甚化する災害が起きようとも、たくましく、しなやかに生きていく力が必要だと思った次第である。

（委員）

日本人の良さを失わないように、人を思いやる心を育み品性を高めていくような教育をしていただきたい。コミュニケーションの部分では、日本語を大切にすることと同時に、自らの思いを正しく相手に伝える能力が必要である。学校教育では知識の蓄積になりがちだが、そうではなく、知識を活用できる知恵のある人材を育んでほしいと思う。

（市長）

日本人の特性、日本人として大切にしてきた伝統文化の中にあるものをしっかりと活かし、地域や学校において役割分担を明確にしながら、社会全体で子供たちを育てていくことの大切さを改めて認識した。

（委員）

現在の社会は物凄いスピードで変化を遂げており、これからの子供たちは、予測

しえない課題に立ち向かっていかなければならなくなっていくと思う。そのような社会で生き抜くためには、周囲と話し合ったり、協力し合ったりして、様々な課題に取り組んでいかなければならない。その中で、人の話を聞いたり、自分の思いを伝えたり、表情や雰囲気から空気を感じ取ったりというような高いコミュニケーション能力が必要だと思う。しかし、私たち大人も含めて、スマートフォンばかり見て、人とのコミュニケーションが減っているような現状もあるので、これが大きな問題になってしまうのではないかと心配している。

また、子供たちは、今まで誰も経験したことのないことに立ち向かっていく、まさに道を切り開いていくことが求められる中で、心の強さも必要になると思う。強い心を育むために何が必要なのか、ここで直ちに答えを出すことは難しいが、何かしら取り組んでいかなければならないと感じた。

（市長）

心の強さについて触れていただいた。もちろんよい体験も大切だが、辛い経験等も幅広く経験することは極めて重要だと考えている。学校教育では、子供たち同士の社会性や協調性を学ぶ機会や先生と子供の関係における学びもある。それ以外には、地域における学びもかなりあると思う。昔はうるさい頑固おやじや悪いことをすればすっ飛んで来て怒る地域の方々がいたため、地域が子供たちにとって貴重な経験の場になっていた。これからも学校と地域がそれぞれの役割をしっかりと担いながら地域総がかりで子供たちを育てていくことの重要性を改めて認識した。

（委員）

改めて沼津の 100 年の歩みを見せていただき、周りの町村と合併をしながら 100 年という月日を重ね、有名無名な多くの方々の御尽力があっての 100 年だったのだろうと推測した。世界中の誰も予測しなかった新型コロナウイルス感染症の蔓延が起きたように、今後も予想しなかったことが起きる世の中になると考えられる。いろいろな進歩や自然破壊等もあると思うが、だからこそこれからの未来を担う子供たちには、生きる力がとても大切になってくると思った。知恵、知識、技、判断力、対応力等だけでなく、家族、仲間、地域の方々と一緒に歩んでいくには、コミュニケーション能力も必要だと思う。これからの子供たちは本当にいろいろな能力を身に付けていくことが重要だと改めて感じた。

（市長）

生きる力についてお話していただいた。委員が行っているボーイスカウトの活動には、「そなえよつねに」という言葉がある。あらゆる危機事象に対応していくために、経験ある方から様々な学びを得ることや、自らも経験を積んでいくことによって耐性を確立していくことが大変重要であると考えている。昨今では、我々大人世代でも体験しなかったことがどんどん起こっている状況であり、このようなことに対応できる子供たちをいかに育てていくのかという大きな課題に直面している。学校、地域、様々な関係者たちがしっかりと手を取り合いながらそれぞれの分野で

力を発揮し合い、未来を担う子供たちを支えていくことが重要だと捉えさせていただいた。

ここからまとめに入りたいと思うが、皆様方からいろいろな御意見をいただいた。過去にはペストの発生等いろいろなことがあり、今を生きる者にとっては歴史的にそういうことがあったという程度の認識だったが、我々は実際にコロナ禍を体験した。普段ではありきたりな普通の活動ができなくなり、行動制限もあった。その中で子供たちは、当たり前のように通っていた学校に行けなくなり、部活動も含めた普通の活動もできなくなった。コロナ禍で生きてきた子供たちは、そもそもお互いの素顔を見たことがないマスク生活を送り、コロナ禍４年目にやっと行動制限がなくなりマスクを外したとき、お互いに初めてこういう顔だったのかという驚きを体験した。自然災害においては能登半島のこともあるが、世界レベルでも日本全国各地においても毎年のように激甚災害が発災している状況である。これらの災害においては、報道等を通じて現地の痛ましい状況を見ることで心にダメージを受けている子供たちもいると感じている。現在、SNS を介した様々な事件が発生しており、闇バイト等に巻き込まれていつの間にか自分が犯罪者になってしまうなど、ネット環境を通じて被害を受けている子供たちもいる。本当に様々な危機事象があり、そのような中で、予測しえない事態への対応力や困難や逆境に直面したときの回復力や適応力、よく言われるレジリエンスも今の子供たちには求められていると考えている。

先行き不透明な時代を我々も子供たちも生きていかなければならない。日本人が本来大切にしてきた社会性や協調性をさらに磨き上げ、多様な能力をしっかりと身に付けながら、人と接する際に必要なコミュニケーション能力も高めていくことが求められている。このようなものをどうやって伸ばしていくかが非常に大きな課題になるが、未来を担う、地域を担うという観点で子供たちを見た場合、我々大人が、子供たちが社会に対して主体的な意識を持って関わっていく環境づくりをすることが極めて重要だと考えている。このことに、教育委員会と我々市長部局がしっかりと連携して取り組んでいくことが、最終的に未来を担う人材育成につながり、まちづくりを進めるための基盤になると捉えているので、皆様方の御理解、御協力を賜りますよう今後ともよろしくお願い申し上げる。

それでは、テーマ１「芸術文化の充実や地域資源の活用について～薫り高い文化やシビックプライドの醸成に向けて～」に移る。本市では、感性豊かな心の育成を目指し、芸術文化環境の充実を図ることで薫り高い文化の醸成に努めているほか、郷土を愛する心の育成を目指し、シビックプライドの醸成に向けて地域資源の活用にも取り組んでいる。本年度は市制 100 周年ということもあり、数多くの記念事業が展開されたが、今後とも本市の魅力を高め継承するとともに、これを支える人づくりに向けた一層の取組が重要であると考えているので、今後の芸術文化の充実や地域資源の活用について意見交換を行う。

意見交換を行う前に、事務局から説明をお願いする。

（事務局）
　芸術文化、地域資源に関連した100周年記念事業、本市の地域資源、学校等との連携事例及び他市の事例について説明

（市長）
　それでは、御意見等をお願いする。

（委員）
　今後、少子高齢化がどんどん進む中で、今までの学校の在り方自体を変えていかなければならない局面が来るかもしれないと思っている。奇抜なアイデアかもしれないが、学校を多機能化し、本来の子供たちへの教育的な機能に加えて、文化芸術の体験、それぞれの地域にある地域資源の学びの場として、子供だけではなく大人も通えて交流できるカルチャーセンター的な側面を持った学校づくりを進めていけるとよいのではないかと思っている。
　事務局の説明を聞いて、市民文化センターが文化活動の拠点として十分に活用されているとは言えない部分がまだあると感じた。施設の魅力や、会議室やリハーサル室が借用できること等、市民文化センターの機能や活用方法が市民の皆様にもっと周知されることで、隣にある総合体育館はスポーツの拠点、市民文化センターは文化芸術の拠点という認識になっていくとよいと思う。

（市長）
　奇抜なアイデアというお話だったが、重要な御意見である。文化芸術に関して、現在も学校教育での取組や地域との連携も行っているところであるが、ICT機器等が今まででは考えられないところまで学校教育に入り込んでいる事実から、機能を固定することが本当によいことなのか。時代の潮流や社会から求められているもの等、様々なニーズに応えなければならなくなったとき、柔軟な発想は解決策を生み出す重要な要素の一つになると考えられる。
　市民文化センターの在り方に関しては、御指摘に感謝する。文化芸術の殿堂である市民文化センターという立派な施設があるので、多くの方々に活用してもらうことが重要である。施設機能の広報や、その機能の今後の在り方、時代の流れにおいて今の機能が本当に適切か、市民が求めているものなのかも考えていかなければならない。併せて、市内に点在する諸施設との連携や広報がしっかりとなされているか見直していくことも文化芸術の発展につながると捉えている。

（委員）
　事務局の説明から、子供たちには実際に外へ出て行う体験学習等、いろいろな教育がなされていることがよくわかったが、子供たちを育てている親世代は、沼津で生まれ育った人ばかりではない。他地域から沼津に移り住んで子供を育てている親世代の皆様にも沼津のことをもっと知ってもらえれば、それが子供にも伝わっていくと思う。沼津の歴史や文化、どこよりも素晴らしい気候風土等の様々な魅力を、

若い世代の市民の皆様に伝えていっていただきたい。

（市長）
　大変貴重な御意見だと思う。郷土の大恩人でありながら、江原素六先生があまり知られていない事実がある。歴史を踏まえて、自分がどういうベースの元で生活し育ったのかということは、自分自身のアイデンティティにつながる。そういう点では、教える側、特に学校の先生方はいろいろな所から来るケースがあり、子供たちに地域のことを教える場面もあるため、知らないでは通らない。これは学校の先生だけでなく、子供たちに接する地域に住むいろいろな立場の人も、沼津についてある程度知っておくことが重要だと思う。
　ぬまづの宝 100 選も市制 100 周年を記念して新たに改訂版を出したが、こういうものを通じて沼津の優れたものを知り、そういう風土の中で自分たちは生まれ育ってきたことをしっかりと認識できると、沼津へのさらなる愛着にもつながると考えている。

（委員）
　文化振興課が主催したお茶会に出席したが、子供お茶会には富士市から来た兄弟が参加していた。浜松からの方もおり、広く市外からも来ていることがわかった。フラメンコも見せていただき、市長と教育長が参加した第九も聴かせていただいた。車イスで歌っている方もいて、すごいなという思いで眺めていた。静浦小中一貫学校でお祝い給食を試食したとき、隣にいた子供がみかんを指差して、「これね、寿太郎みかんなんだよ。」と、すごく誇らしげに言っていたのが記憶に残っている。これまでに二十歳の議会を３回傍聴したが、今年は、最後の「わたしにとっての沼津の宝」を述べるところで、多くの成人が人と自然について語っていた。
　沼津には、誇れる自然や文化がたくさんあり、歴史もそれなりに古く、ただ、多くの方にその魅力を十分に周知していただけていない気がする。若い人はわかっているが、よそから来て初めて知ったという方もきっと多いと思う。学校単位で地元企業と連携して見学や体験を行っていると聞いたが、それを学校単位ではなく、他の学校にも波及してもっと広い範囲で行えば、保護者にも知ってもらえ、子供たちが成長したときに、「ひものを作ったね。」「あそこの工場ではこんなもの作っているよ。」というような話ができ、広く周知されていくと思った。

（市長）
　最後の御意見はとても大事な話であり、各学校で特色ある取組をやっているが、そこで終わらせるのは非常にもったいないということだったと思う。例えば、学校交流という形で共有し合うことで、その学校では知っていたことが他地域では全く知られていないことも認識し合える。２校、３校の交流になれば、それぞれの地域の大切なものとして共有できる。そうすれば、幼少期から沼津の特色、歴史や文化等を共有してさらに学びを深めることにつながると思うが、どんな取組が一番ふさわしいかはいろいろと議論の必要性がある。沼津には、海、山、川があり、海の民、

山の民、まちの民がいる。地域の特性に応じてそれぞれの文化や歴史が継承されているので、特定の学校だけの取組で終わらせるのではなく、市内の学校で連携することにより、まさに地域総がかりで未来を担う人材を育成することにつながると考えた。

（委員）

私は東京から沼津に来た人間だが、沼津は気候温暖で非常に住みやすく、海産物も農作物も豊かである。東京と違ってごみごみしておらず、海も美しく富士山もきれいである。川を散歩したり、少しドライブしたら内浦、西浦のきれいな海が見えたりする非常に美しいところだと思っている。外から来ると沼津の良さがよくわかるが、沼津に住んでいると、こういうものが当たり前のようにずっとあるため、その良さに気付かないのではないかと思える。子供の自己肯定感を育むには、よく褒めたらよいと言うが、地域の自己肯定感をどうやって醸成するのかを考えると、他と比べて沼津はこういうところがよいと客観的に評価できるとよいと思う。沼津で子供たちを育てながら沼津の文化を教え、子供たちに、ここが沼津の素晴らしいところだと気づいてもらえるとよい。ラブライバー等、多くの方が外から来て、沼津はとてもよい所だと口をそろえて言っていると思う。外から来ている人たちから評価を受けていることも知ってもらえるとよいのではないかと考えている。

（市長）

貴重な御意見に感謝する。沼津市だけでなく静岡県の県民性と言うのか、沼津の市民性につながるかと思うが、何でもあって大変恵まれた地域であるため、目の前にあるものが当たり前な状況になっており、それが感謝の対象である認識や、それを活用して何か、極端な話一儲けしてみようというような発想につながらないという話をよく聞く。一番残念なのは、「沼津市って何もないとこだよね。」と言う方が結構いることであり、私は本当に沼津には何もないのかを改めて聞きたくなることが多々ある。沼津から一度も外に出たことがない方がそういう発言することが多い。先程、二十歳の議会の話が出たが、一度外に出て、また沼津に戻り、改めて沼津の良さを知る方が結構いると聞いている。慣れ親しんで当たり前になっているものに対する感謝の気持ちが薄いため、もう一度、市民の皆様自らそのことを見直すことも非常に重要だと捉えている。

ぬまづの宝 100 選の話を先程もしたが、もう少し掘り下げてぬまづの宝 100 選を見てみると、こんなにすごいものだったのかとわかることもある。ラブライバーの話も出たが、市外から来た方、特に外国人が感じる沼津の素晴らしさや良さは、SNS 等を介して発信されており非常に参考になる。それらを見ると改めて沼津の良さを知ることになるため、いろいろな手法を講じて沼津の良さをもう一度見直して認識した上で様々な取組を行えば、沼津の文化芸術がさらに発展する起爆剤になると考えられる。

（教育長）

先程紹介があったように、各学校で昨年７月に沼津産の食材をふんだんに取り入れた市制 100 周年お祝い給食がふるまわれた。その際に、市長自ら動画に出演して子供たちに語りかける中で、子供たちが改めて故郷の良さに気付き、沼津の魅力がたくさん伝わったと思う。

同じく昨年７月に、西浦の河内地区で 170 年前から続いている天王祭で神楽舞を見学した。また、松城家住宅前で戸田地区に伝わっている漁師踊り、漁師唄を見学したが、こちらは 1770 年代に戸田村に伝えられ、漁師によって語り伝えられてきたと伺っている。どちらでも、東部の伝統芸能が地域の経験豊かな年配の方たちから若者、子供たちへと着実に引き継がれている様子が見られた。

市内の子供たちの取組を２つ紹介する。１つ目は、沼津市立沼津高等学校１年生が、小中学生向けにまとめた職業人インタビュー冊子『＃ぬまづしか勝たん』に続く、『Ｕは沼津をＩしてる？』を作成したことである。これは地域に貢献できる人材育成を目指す「沼津未来創生プロジェクト」と称した探求学習の一環として取り組み、沼津商工会議所青年部、沼津市産業振興部商工振興課の協力を得て完成させた職業人インタビュー冊子である。本市に寄贈され、小学校５、６年生と中学校の各クラスに配布している。今回は他の地域から沼津市に来て市内で働く人たちに、「なぜＩターンやＵターンをしたのか」をテーマにインタビューをしてまとめたものである。この活動を通して高校生たちは、沼津でしかできないこと、沼津市が今後変わるべきところや課題等を知ることができ、これから自分の進路を決める時に役立つと述べている。また、小中学生に対しては、沼津市の将来を担う皆さんにとって働くことへの興味を持つきっかけになるようにと綴っている。小中学校では地域学習やキャリア教育の教材として活用しているところだが、高校の段階で地元の企業で働く人々に実際に触れあうことに大きな意味があり、Ｉターン、Ｕターンにもつながると思っている。

２つ目は、長井崎小中一貫学校の児童生徒の有志が、プロの写真家やイラストレーター、地域の人たちと一緒に、地域情報誌『うらっち』を発行していることである。この取組は令和２年度から始まり、子供たちが自分たちの住むまちを取材し地域の魅力を地域の内外に発信しており、もうすぐ４冊目が完成する。『うらっち』は、市役所、ららぽーと沼津など市内各所で配布しているほか、YouTube の公式チャンネルにおいても動画配信しており、私も視聴したが、非常に見ごたえのある構成に仕上がっている。このことに関連して、昨年８月に長泉町で開催された中学生による「わたしの主張 2023 静岡県大会」についてお話しする。東部地区代表に選ばれた５人のうち２人が沼津市内の生徒であり、一人が長井崎、もう一人が片浜中学校だった。長井崎小中一貫学校９年生の大城柚稀さんは最優秀賞、片浜中学校３年生杉山奈生さんは優秀賞に選ばれ、大城さんは、「過疎化から地域を救う取材」と題した主張をした。彼女は、４年間プロのクリエーターから専門的な講義を受けながら、内浦・西浦地域を取材して作る地元情報誌『うらっち』の編集を通してわかった地域の実態から自分で問題を発見し、その問題を自分事として捉えた。このままでは近い将来、自分が住んでいる地元から大人や子供が消えてしまうのではな

いかという危機感を持ち、この状況をどうにかしたい、今自分にできること、今後できることはなんだろうと考えた。様々な人々と関わり合いながら見通しを立て、考えを深め、その答えとして最もよいと思う方法として出した結論は、地域について詳しくなることだった。そして、より多くの人に地元の魅力を発信していくことが自分にできることだと確信している。この主張のまとめでは、幅広い世代の人たちが、この地域で豊かに暮らすことができるように、これからも地元情報誌『うらっち』の編集リーダーとして、地元に住んでいる一人として、地域の問題を改善するきっかけづくりに取り組んでいきたいと締めくくっていた。このように子供たちが芸術文化、地域資源等の財産を守り、次の世代に継承していく意識を持つことが非常に大切である。それがシビックプライドの醸成につながっていくと私は信じている。

また、第六巻まで編集されている『絵物語ぬまづ昔ばなし』は、市内の子供たちにとって自分の生活している地域で語られてきた話をリニューアル化した絵本であり、後半のページでは子供たちが実際にレポートした内容も掲載されている。これによって子供たちに郷土愛が育まれ、郷土に誇りを抱くことができる、とても素晴らしい活動だと思っている。２月には第七巻となる内浦地区に伝わる『おみねと島吉』が発行される予定であり楽しみにしている。

先程、先行きが不透明な時代に必要な資質・能力について、コミュニケーション能力の話が出ていたが、私はコミュニケーション能力、あるいは柔軟性、適応力、たくましく生きていく力をつけるには、体験が非常に大事だと思っている。沼津は自然が非常に豊かである。狩野川ではカヌーやサップの体験教室、香貫山や愛鷹山でトレッキング体験等を展開してはどうか。実際に体験をする中で、子供たちはコミュニケーションを図りながら、多少辛くても頑張り抜いて、互いに協力して乗り越えていく中で、様々な力が育まれると思う。

二十歳の議会について校長先生方にお伝えする。「私にとって沼津の宝は、学校の先生方です。」と答えてくれた二十歳の方がおり、私は非常に感動した。

（市長）

子供たちの様々な学びや気づきには地域の土壌が極めて重要であり、様々な土壌の中からいろいろな活動や取組が派生すると捉えている。それらをさらにパワーアップさせるには、周りの大人、専門家集団、専門的な見地を持つ方がいかに関わっていくかも大変重要だと考えている。御紹介いただいた取組は、沼津における成功事例であり、自慢していくべきものだと思う。

最後にまとめとなるが、よく言われる文化芸術のレベルは、そのまちにおける、時として生活信条や民度のバロメーターになることがある。この地域に根差した文化芸術をさらによくして発展させることは、まさに我々の責務であると捉えている。

沼津市には本当に歴史的背景を含めた様々な文化芸術が根付き、その文化をしっかりと地域住民に伝え継承している多くの方々がいる。そのような方々がそれぞれの場面で、継承、発展させていくことも重要だが、それらをまとめていく場面や場所も大切だと思う。その点では、沼津市には市民文化センターがあり、その活用次

第でさらに沼津市の文化芸術を高め、子供たちの心の醸成や将来に向けたいろいろな取組等によい影響を与えると考えられる。したがって今後、文化センターをどうするかも極めて重要なテーマになると感じた。これらの実現には、教育委員会と市長部局がどの部分で連携するかを明確にし、体系化していくことが大変重要だと捉えており、皆様方の今後の御理解、御協力を賜りますようよろしくお願い申し上げる。

それでは、テーマ２「多様なセーフティネットの確保について～支援を必要とする子供たちの実態を踏まえて～」に移る。現在、不登校、貧困、ヤングケアラー、虐待、障がい、外国人家庭、LGBTQ など、多岐にわたる支援が子供たちに必要となっており、今後ますます子供たちの置かれた環境は複雑かつ多様化していくと考えられる。これからの 100 年を支える子供たちが心身ともに健やかに成長できるように、一人一人のニーズに応じた学習をはじめとする多様な支援が必要であるため、地域ぐるみのセーフティネットの構築など、支援の在り方について意見交換を行う。意見交換の前に、事務局から説明をお願いする。

（事務局）
支援を必要とする子供たちの状況、国の動向、本市の取組及び関連事例について説明

（市長）
本日お集りの皆様は、子供たちの未来のことを真剣に考え、一人一人の健やかな成長を祈り、その実現のために様々な取組を行っている方々である。事務局の説明では、なかなかに重たい話を提示された状況であるが、皆様方の御意見等伺っていきたいと思う。

（委員）
沼津市においても国においても、いろいろな法律等で子供たちを助けていく環境がどんどんできているが、子供たちには困難がたくさんありすぎる。そのため、子供たちから直接声を上げることがなかなか難しいのではないのか。本人自身が気付いていなかったり、相談してよいことなのか迷っていたり、そういう事例の方がとても多いと思う。家庭内では無理かもしれないが、子供たちが声を上げる前に周囲の大人が気付いてあげ、支援場所につなげる働きかけをする必要がある。大人であっても法律や市役所にある様々な支援の窓口等を知らない方も多いので、市民の皆様に広く周知し、自分の子供だけでなく、近所の子供であっても全く知らない子供であっても守っていくことが大切である。子供たちが抱える多様な問題やセーフティネットの必要性は、最近取り上げられることが多くなったけれども、あまり知られていないことが多い。早く子供たちを助けられるように我々大人がどのように動いたらよいか、非常に多くの方法があると思うので、具体的な方法の周知を進めてほしいと思う。

（市長）

子供たちに周りから見守られている環境をつくる大切さを感じた。別の話になってしまい大変恐縮だが、ゲートキーパーというものがある。これは総務省が進めている自殺予防対策の一つであり、その取組としては、悩み苦しんでいる人にいち早く気づき、声をかけて聴く、そして、専門家につなげるものである。やはりここでも専門家につなげる知識が非常に重要である。周囲の人がそのような知識を持っていればいち早く対応できるため、多くの方々で、大変な思いをしている子供たちを救える環境につながると考えている。委員の話を聞いて、私もゲートキーパーをやっているが、これはゲートキーパーと同じ環境をつくることが必要だと改めて認識した。

（委員）

沼津市にも貧困世帯、児童虐待、ヤングケアラーがいることは知っていたが、事務局の説明にあったように、数字になると小さい数字だが確かにいることを改めて認識できた。

不登校は年々増加しており、私も不登校の児童生徒を何人か知っている。青少年教育センターへ行けば学校に登校したことになると聞き、保護者に伝えたが、結局行っていないと言われ、制度があってもなかなか積極的に利用しようとはならないことが改めてわかった。不登校になるきっかけは、保護者に聞いても「わからない。」と言っていた。入学式以来通学しておらず、先生からどのような対応があったかは聞いていないので残念ながらわからない。

ADHD（注意欠如・多動症）の子供も知っている。学校の先生の勧めで、その子は通級に週に１回、１時間通い始めて１年近くになるがあまり改善されている様子は見られず、それだけ複雑なのだと想像している。

そのような様々なことにどう対処していくべきかと問われたら、こうしたらどうかと具体的には申し上げられない。正直に言ってわからない。ただ、こども家庭庁が設立されたように、やはり行政が縦割りではなく連携することがとても大切だと改めて思う。警察や児童相談所、子育て支援課等、様々なところが関係すると思うが、それぞれが単独で対応するのではなく、相談し合う、あるいは、連絡して対応してもらうというように、広い範囲で連携して進めていくのがよいと確信した。

（市長）

制度がありながら活用しにくい環境については、原因を追究することが大事だと思う。そこに行けば、自分の悩みや置かれている環境について伝えられるかもしれないけれども行かなかったのはなぜかを、我々がしっかり把握しておく必要がある。行きにくい環境、話しづらい環境を決して作ってはいけないと思った。様々な機関がしっかりと連携することの重要性も御指摘いただいたので、どのように進めていくのかを検討しなければならないと思っている。

また、ファーストコンタクト、最初にコンタクトを取った方の対応次第で、救われた命もあるし、そうでないケースもあると聞いている。このようなことに関わる

立場の方々が、様々な知識をある程度把握し、制度や対応する場所があることを知っておくことも重要である。これは学校現場だけではなく、子供たちを取り巻く地域も同様で、そういう方が少しでも多くなれば救われる子供たちも増えると思う。

（委員）

子供に関する問題は非常に多岐にわたっており、原因やそれに対する対処方法もまちまちなので、何もかも一緒くたにどうこうというのは難しいと思っている。これは家庭の問題なので、第三者が家庭に入って何かするのは非常にやりづらいところがある。子供自身でも親でもよいが、手を差し伸べてほしいと自ら助けを求めてくれることが大事だと思っている。ただ、当事者は自分が置かれた環境は生まれてからずっと変わらず、それが当たり前だと思っている方が結構いるため、今置かれている状況は助けが必要だと知ってもらうきっかけとなるように、こういう方はケアが必要だというアナウンスをして知らせる必要がある。我慢することが美徳という考え方があるかもしれないが、我慢のし過ぎは体に毒なので、「そういうところは我慢しなくてもいいよ、助けを求めていいよ、あなたは今助けてもらうべき状況にあるよ」ということに気付いてもらうきっかけをつくるべきではないか。助けを求めようかと考えたときに、助けられた実例が周りにあると助けを求めやすくなったり、他の潜在的な方も助けを求めてくれたりすると思う。教育委員会としてどこまでできるのかわからない部分は多いが、助けを求める手が伸びる環境づくりが必要だと考えている。

（市長）

委員からお話があったように、教育委員会だけでとか、学校現場の中でのみ対応することは難しいと捉えている。外部の専門家集団の知見をしっかりといただきながら進める体制、先程来話が出ているように、いろいろな機関がしっかりと連携していくことの大切さを感じた。

家庭環境においては、それが当たり前だから自分が最悪な状況に追い込まれていることに気付かない子供たちがいるということも聞いている。どんな環境でも親は親であり、頼る人が親しかいない子供たちをどのように救うかは非常に難しい問題である。そのような子供たちをキャッチし救う環境づくりが、早急に求められていると捉えている。委員は弁護士という仕事柄いろいろな案件に取り組まれているからこそ、そのような思いを持ち今の御意見が出たのだと改めて感じた。

（委員）

私は、今の子供たちの生きづらさの中で、特に不登校について身近なこととして意識しており危機感を感じている。事務局の説明の中にデータも出ていたが、今は不登校の子供がクラスにいることが当たり前である。クラスに１人、２人ではなく、もっといることが常態化してきていることが、すでに大きな問題だと思っている。なんとか学校に通わせたいという気持ちがあっても現実的には難しい状況があり、もう学校に通わせるという１つの選択肢だけでは追いつかないという認識がある。

学校に行かなければ学習の機会が担保されないため、それはその子の将来に良くない影響を及ぼすと考えられる。沼津市には、学校に行けない子供たちが通える場として青少年教育センターがある。しかし、市の中心地にあるため、近所でない場合、保護者の送迎がないと行けないなど条件が揃わないと利用できない。支援が必要な子供たちがこれからどんどん増えることが予想される中で、キャパシティーとして対応しきれるのかという不安がある。青少年教育センターが持つ学校以外で学べる機能が、それぞれの地域に分散される形が求められる。学校ではないがここなら行けるという居場所が、複数あるとよいと思う。家に引きこもってしまわないように、また、教育の機会を確保するためにも、そのような柔軟な対応が必要になると思っている。

子供たちには様々な生きづらさがある中で、教育だけでなく福祉分野へのニーズもだんだん増えている現状がある。今後、教育と福祉の機能を併せ持つ施設が地域に分散化され、困ったときにそこに行けば助かるというような包括的な役割を果たす場所になるとよいと思う。

（市長）

委員から出た教育と福祉の連携については、この総合教育会議において、教育委員と市長が議論すべき貴重な御意見である。実際に、そのようなニーズが高まる中、教育の世界だけで対応することは難しく、他との連携が重要だという指摘もある中、なお一層、教育委員会と市長部局の連携を見つめ直すことが重要だと考えている。

また、不登校への対応に関して、全国的には成功事例もあり、不登校だった子供が、その学校に通うことになって普通に楽しく通えるようになったということが実際にある。成功事例をしっかりと学び参考にすることも重要であり、環境を整備することで、苦労している子供たちを一人でも多く救うことができればと考えている。

（教育長）

教育振興基本計画のコンセプトに、日本社会に根差したウェルビーイングの向上が掲げられている。全国学力・学習状況調査の児童・生徒質問紙では、これに係る項目として、「普段の生活の中で、幸せな気持ちになることはどれぐらいありますか。」という質問が加わった。本市の状況は全国と比較して、「幸せな気持ちになることはあまりない、全くない」と答えた割合は、小中学校ともに、国の数値を若干上回っている。市長が先程おっしゃっていたが、重要なのはそのように考える理由、なぜかを明らかにすることである。幸福感、幸福感度は、その子供の性格、あるいは、育ってきた成育歴等も影響する。学校でできることは何かを考え、学校教育を通して子供たちの幸福感度を上げることは必要だが、子供たちはどんなときに幸せな気持ちになるのか、なぜ幸せを感じることが少ないのかを分析する必要があると思っている。法律が施行されて組織が発足し、こどもまんなか社会の実現ということで、子供の意見表明の権利、あるいは、最善の利益を実現する観点からいろいろな相談体制の整備が重要だと言われている。どこに行けば相談ができるのか、どのように対応してもらえるのか、そのような周知がやはりまだ足りない。相談体制に

ついても、事案が起こった後にとる対応の体制と、未然に防止するための体制の２つが求められる。全ての子供たちが安心して学校に通え、安心して生活できる。子供が困っているときに、「助けてほしい」と安心して声が出せる環境を大人がつくることで、SOS を表明できる子供たちが育っていくと思う。大人も子供も、しっかりと SOS を出せる環境が非常に大事だと思っている。

（市長）

それでは、まとめということで私から発言する。事務局の説明も含め、子供たちを取り巻く環境は劇的に変化している。ある意味において、子供たちは時代の激流の中に置き去りにされている部分もあり、その濁流の中をもがいているような環境を皆様方の発言の中でも感じた。実際の数字でも、そのあたりのことが顕著に表れていると捉えている。そのような状況で、現時点において万能なセーフティネットは存在していないと言っても過言ではないと思う。そんな中で本日の総合教育会議は、先程来話しているように、教育委員会のことに関して市長部局の私が、いろいろと意見をする場所である。教育において管轄外という状況であるが、子供たちを取り巻く情報を共有し、現場はどういう状況になっているのかをしっかりと捉えることが大変重要であり、教育委員会と市長部局の連携は、ますますしっかりしていかなければならないと考えている。

子供たちを見守る立場である我々大人が、子供たちを支え見守るために、市長部局と教育委員会が同じ価値観や方向性を持って取り組んでいくことも重要だと思っている。関わる我々大人自体が見取る力を身に付けていかなければ、子供たちを守ることができないのではないかと考えた。本日いろいろな御意見が出たところであり、この議論を見据えながら、現在ある支援体制が本当に適切なものであるかをしっかりと見直すこと、併せて、先程来話をしているように、市長部局とか、教育委員会とかということではなく、その枠を超えた建付けの体制づくりを進め、双方でやっていくべきだと捉えさせていただいたところである。現状を把握するためには、現在いる子供たちや保護者からしっかりと意見等を聴取させていただきながら、新たなセーフティネットの構築を皆様とともに進めていきたいと考えているため、今後ともよろしくお願い申し上げる。

以上で、予定していた会議日程を全て終了した。本日は、大変お忙しい中にもかかわらず御出席いただき、それぞれのお立場から御体験等を踏まえ貴重な御意見を寄せていただいたことに、改めて心から感謝申し上げる。

５　開会